



戦

国

戦

姫

風

林

火

山

上田ながの  
表紙イラスト:みかん。

試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された  
『戦国戦姫 風林火山』  
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



# 戦国戦姫

## 風林火山

上田ながの  
表紙／みかん。

## 登場人物紹介

### Characters

---

は やまりん

#### 葉山凛

女だてらに黒い甲冑に身を包む、女武者。普段は仲間を思う優しい女性だが、戦では鬼神の如き強さを誇る。気高く、真面目な性格で、いまだ処女である。

たけだ はるのぶ

#### 武田晴信

凧の守る戸石城を攻める、戦国最強の甲斐武田軍を率いる武将。色を好み、人のみならずありとあらゆる生物をも犯すという変態的嗜好を持つという。

天文十九年（一五五〇年）九月——。

木々が生茂る険しい山中に建てられた戸石城といしに、五百名ほどの兵が詰めていた。兵達は自ら槍を握り、いつでも打って出られるほどに殺氣立っている。

そんな彼らの氣を背中に受けながら、櫓に立つ一人の武者が城外を見つめていた。

どちらかといえば小柄な身体に黒い甲冑を身に着けている。全身を鎖帷子で包み隠し、籠手や脛当、胴によつて隙間なく完全武装していた。鎧の下には白い着物を身に着けているが、まったく見えない。頭には兜を被り、顔も面頬で隠されている。ただ、面の下に見える瞳は、どこか優しげな光を湛えていた。

武者はゆつくりと兜を外す。すると、今まで隠されていた長く、艶やかな黒髪が外界に開放されフワリと舞った。次に面頬を外す。

開放された顔は、まるで人形のようにだった。少し吊り上がった独特な瞳。スツと通った鼻筋と艶やかな唇が、絶妙なバランスを保っている。

それは少女だった。

葉山凛はやまりん——それが彼女の名である。

凛の眼前には、城を取り囲む大軍が見えた。その数凡そ七千。戦国最強とまで謳われた甲斐武田かいたけたの軍団である。

七千対五百——誰の目にも勝敗は明らかだった。

だが、甲冑少女は口元に笑みを浮かべると、殺気立つ味方兵へと振り返り、ドンツと槍で思いつきり櫓の床を叩いた。

「武田の兵が何するものか！ いいか、我々は誇り高き信濃しなの武士である！ 上田原うへだはらでの合戦を思い出せ！ あの時も我々は奴らを粉微塵に撃ち砕いてやったではないか！ 今こそ再び、奴らに我らの強さを思い知らせてやるのだ！ 城を守りきりさえすれば、我らは必ず勝てる！ よいかっ！」

山々に響き渡る声で、兵達を怒鳴りつける。

「おーっ！」

兵達は少女に応えるように、槍を振り上げ氣勢を上げた。

戦端が開いたのは直後の事である。

武田軍は横田よこた備中守高松つちゅうのもりたかしを指揮官に、次々と城に取りついて来た。数だけでいえば圧倒的である。

城は山中の要害にあり、敵は砥石のような崖を登ってこなければ城内に突入する事はできない。城方は敵に対して石を落したり、熱湯をかけたりして対応した。しかし、所詮は多勢に無勢であり、何名かの侵入を許してしまう。

ここからが凜の仕事だった。

「侵入者は私に任せろ！ 皆は城壁を登ってくる連中を何とかすればいい！」

7

といつて怒鳴ると、激しく槍を振り回しながら、侵入した敵兵に向かっていった。兜も面頬も着けていない。部下の数人が彼女を制止しようとしたが、声を振り払い、ただ敵だけを少女は睨みつけていた。

「女だと？」

侵入者は嘲るような声を上げる。だが、次の瞬間には敵の喉元に槍が突き立てられていた。刃が引き抜かれると血が噴き上がり、凜の鎧を赤く染める。

「悪いな……私をその辺の女と思うなよ。死ぬぞ」

返り血で顔を染めながら、静かに告げた。

ゾクリとするほど冷たく、感情が籠っていない声に残った侵入者達の顔が青ざめる。だが、彼らとて歴戦の武士であり、すぐに太刀を引き抜くと凜に向かって来た。

三人の男が同時に刃を振り上げる。瞬間、少女は槍を振るった。

一人の刀を柄で払うと同時に、刃でもう一人の首を切り裂き、残った最後の刀を紙一重で避ける。更に敵が次の行動に移るよりも早く、槍を捨てると太刀を抜き、一人の面に刃を叩きつけた。

戦場に咲く花のような鬼。

「き、貴様っ！」

残った一人は声を震わせたが、槍によってはね飛ばされた為に、その手に太刀はない。

「……これが戦だ」

丸腰の敵——しかし、少女は何の躊躇もする事なく刃を振るつた。

戦いは日が落ちるまで続いた。

凜の全身は血で真つ赤に染まり、兵達も疲れきつた様子で城中のあちこちにへたり込んでいる。

(まだだ……まだ、始まったばかりだ)

そんな仲間の様子を見つめながら少女は奥歯を噛み締めた。

(……殿)

そして本来の城主の姿を思い浮かべる。

むらかみよしきよ  
村上義清——それが彼女の仕える城主の名だ。北信濃一帯の国人衆の代表であり、常勝

不敗だった武田軍に一度ではあるが唯一勝利を収めた者である。

凜はそんな義清を尊敬し、誰よりも信頼していた。

だからこそ、

(ここで負ける事は許されない……)

と心に刻みつける。

この籠城戦は、村上家にとっては生き残る為の危険な賭けであった。



北信濃を守る上で、前線基地である戸石城を武田に取られるわけにはいかない。しかし、数の上では勝ち目など方に一つもない。そこで義清が出した策は、危険な奇襲戦だった。

戦力差から考えれば、籠城戦以外考えられない状況である。野戦を挑めば勝ち目などある筈がなく、城が要害にある事だけを頼りに戦う策だ。当然武田も同じ事を考えるだろう。義清はその裏をつき、城を脱し、敵軍の裏手に回り奇襲しようとする案したのである。上手くいけば巨大な戦力差も覆す事ができる策。しかし、軍を率いて敵に気づかれずに裏手に回るには、数日から数十日、下手すれば一月もかけて慎重に行軍しなければならぬ。その間に守りが手薄になった城が落ちてしまえば、それですべては終わりである。

諸将は当然反対した。だが、その中で唯一凛だけがその策に賛成した。

「殿が攻撃を開始するまで、私が必ず城を守って御覧に入れます！」

女の身でありながら武士として戦場に出られるのは、すべて義清が信頼してくれたからこそである。

（その恩を今こそ返す時）

だからこそ負けられないのだ。

翌日からの戦闘も凄惨極まるものとなった。

確かに守備に徹すればいい城方の方が被害は少なく、敵には夥しい犠牲が出ている。し

そんな彼らを見てみると、自然と瞳から涙がポロポロと零れる。でも、今の凛にはその理由が分からなかった。

「そうだな。お前達も参加しろ。今なら戦姫殿が自らお前達のモノを扱き、啜えてくれるぞ！」

主従の間の一瞬の交差を見逃さなかった晴信は、素晴らしい事を思いついたというように手を叩く。

「だ、誰がそのようなこと！」

当然雨宮はそれを拒否した。

「あ、しよれはいひでふね……ほら、皆もわらしといっひよにしまひよ」

しかし、家臣の想いはもう凛には届かない。少女は晴信と繋がり、腰を振ったまま器用に家臣達のもとに這い近づいていくと、その下穿きを降ろして肉棒を取り出した。

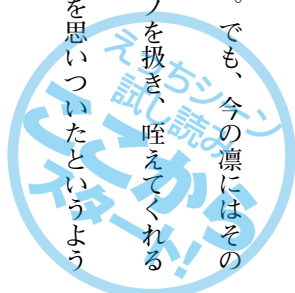
「や、やめてください姫！ 正気に、正気に戻ってください！」

雨宮は必死になって訴える。だが、彼の肉棒も既に勃起しており、女の身体を求めている。それにいくら止めたところで、凛の耳に言葉は届かない。

「これが……へへ、いちやらきまふ」

といって自ら部下の男根を口に含んだ。

舌を勃起に絡ませながら、頬を窄めて激しく吸引する。牡の味が本能を刺激する。



「ほらほら、他の連中はいいのか？ 姫様にこんな事してもらう機会なんて、もう二度とないかもしれないんだぞ」

凜にされるがままにされながら、晴信は仁王立ちで残りの家臣達を睨みつけた。彼らは獣のようになった主人の姿を見つめ、ゴクリと息を飲む。

「や、やめろ！ お前達、相手は姫なんだぞ！ 分かっているのか！」

だが、そういう雨宮自身、少女に口奉仕をされて動けないでいる。それが家臣達の最後の理性を打ち崩した。

「すいません雨宮様。お、俺……む、昔から凜様の事が……」

「お、俺も……」

彼らは立ち上がると、自ら肉棒を晒した。

今の凜は来るものを拒まない。それどころか待ち望んでいたかのように満面の笑みを浮かべると、自分から手を伸ばして彼らの肉棒を扱き始めた。

硬い勃起の感触。向けられてくる何本もの肉棒。凜は順番に舌を這わせ、舐める。手や口で奉仕してもらえず、余ってしまったものは、少女の脇の間に男根を挟んで腰を前後させた。鎧から湧き出てくる唾液が、ちょうど潤滑剤となる。

（凄い。私……全身に男のモノが……幸せ。こんな幸せな事があつたなんて……）

何も知らなかった。寧ろ自分<sup>むし</sup>が女である事を捨てていた。そんな自分が今考えればなん

とも愚かしい。

だらしなく表情を緩めたまま、腰を振りつつ勃起を扱っていると、晴信の手が胴にかけられた。すると掌が輝き、胴だけが消失する。これまで隠されていた白い肌が、現れる。唾液で濡れた背中が月明かりで輝き、それほど大きくはないが形のいい胸が晒された。桜色の乳首は痛々しいほどに勃起している。腰振りに合わせて動く双丘が更に男達の目を惹きつけた。籠手と脛当、腰回りの佩楯に肩に着けられた鎧袖。残された武装が揺れて音を立てている。

牝としての本能を丸出しにした少女の姿に、遂に武田家臣達も我慢できなくなったのか、晴信の命令を待たずして群がってきた。全員勃起を丸出しにしている。

「あは、すごい……みんなに勃起してる……」

近づいてくる肉棒。少女の目に映るそれらは、どんなものよりも美味しそうに見えた。

「まったく仕方がない奴らだ」

家臣の姿に晴信は苦笑すると、突然動いていた凜の腰を押さえつけ、彼女の身体を持ち上げると、騎乗位姿に体位を変える。

「さあ、挿入いれたままこちらを向くんだ」

「ふあ、ふあい……」

敵の命令を素直に受けると、凜は一旦肉棒に対する奉仕を中止し、晴信に対して正対す

るように身体の向きを変えていく。

勃起を膣中に挿入れたままの回転行動。膝を立てた蟹股のような体勢は、どこまでも男を誘う。

少女の動きに合わせて締めつけられた肉棒は、徐々に向きを変えていく。龟头が肉壁に引っかけり、肉茎が襞を擦り上げる度に凜の口はだらしなく開き、唾液が流れ落ちた。

「はひっ……う、うごひてる……わ、わらしのにやかで、硬いものがうごひてる……おひっ！ しぼ、絞られる！ 棒、だ、男根が絞られる！」

快感が強過ぎて、少女の動きは遅々として進まない。あまりの動きの遅さに、見つめる牡達の我慢は限界に達していた。武田家臣と、凜の家臣。敵同士であつた者達が共に立ち上がると、彼女の腕を掴み、無理矢理回転させた。

グジュブ、ジュブルウウツ！ プシュツ！ プシャアアツ！

「ダメツ！ ひんっ！ ひ、引っかかつて、膣中で、膣中で引っかかつてふ！ うあつ！ でふ、にゃんかぢやふ！」

少しずつの動きで耐えてきた感覚が、一瞬で全身を襲ってくる。勃起が突き刺さつた蜜壺からは大量の愛液が噴出し、小さな身体は打ち上げられた魚のように痙攣した。最早口を閉じる事はできず、半分白目を剥いている。意識もはつきりとはせず、ふわふわと宙を舞っているような気がした。

だが、男達は少女を休ませようとはしない。力が抜けた身体でぐったりと晴信に身体を預ける凜を引き起こし、籠手を着けたままの手で肉棒を握らせる。触れた途端、甲冑少女は無意識の内に勃起を扱き始めた。

「駄目ではないか。俺はまだイッてないぞ」

晴信は笑うと、自ら腰で一突きした。

「ほふうっ！」

亀頭で子宮を叩かれる。その途端少女の口からは甘い嬌声が上がった。絶頂を迎えた直後だというのに、すぐに身体が燃え上がってくる。それに、未だ最後の一線を越える事ができない肉棒の感覚が、心を焦らした。

「射精だしたい。射精だしたいの！」

うわ言のように呟きながら、佩楯を揺らしつつ腰を振り始める。

「お、御屋形様！ もう耐えられませぬ！ わしもいきませぬぞ！」

真つ赤な具足に身を包んだ家臣の一人が、我慢も限界に達したのか凜のむっちりした白い臀部に手をかけると、割れ目を力で開く。すると薄ピンク色をした菊門が衆目の前に現れる。蜜壺から流れ出た愛液で、既に肛門は洪水でも起きたかのようになっていた。

そんな菊門に肉竿が添えられる。

「そ、おふっ！ そ……こはちがふ！」

僅かに残った理性が、敵の行動に恐怖を覚えた。挿入いられる器官ではなく、排出する為だけの器官。そこにモノを挿入いられるなど、考えた事もない。

「是非もなし！」

しかし、男は容赦する事なく、腰を押し進めた。

「ぐひあつ！ んふつ！ んふうつ！ な、なかつ！ 広がって、私の肛門が広がっへ！ ほふうつ！ な、何で？ まは、まは感じる！ にほ、にほんつ！」

排泄器官は痛々しいまでに拡張された。腸壁を男根が削っていく。薄い肉壁を隔てただけで、二本の肉棒が少女の身体を挟み込んだ。

更に新しく挿入された勃起の感覚が、やはり伝わってくる。

「驚いたか？ 弾正忠の術は俺にかけられたのではなく、戦姫殿の身体にかけられたのだよ。つまり、身体の中に突き込まれば、誰のモノでも感じてしまうというわけだ」

得意げな晴信の言葉。しかし、凜の耳には何も届かなかった。

瞳には既に正気の色はなく、二穴を犯されながら自ら腰を振り続ける。両手では籠手の中まで感じる熱を発する肉棒を扱きつつ、目の前に突き出された男根にむしゃぶりつく。

奉仕されない男達は、どこでもいいから凜の身体に肉棒を擦りつけ、腰を振った。頬や胸はもちろん、髪や足裏にまで肉棒を感じる。

自分はなんと馬鹿だったのだらう。こんな気持ちがいい事を今まで知らなかったのだ。

過去の馬鹿さ加減を心の中で嘆いていると、手で扱っていた肉棒が突然膨れ上がり、激しく射精を始めた。

ブビユツ、ブビユルウツ！

とそれに合わせるように、他の者も射精を始める。吐き出された精液は少女の顔に、身体に降りかかった。口腔内にも撃ち放たれる。一瞬で口の中はいっぱいになってしまい、凜はそれを飲み干そうとしたのだが、その間もなく新たな肉棒を突き込まれ、射精される。息つく暇もない連続口内発射で、少女は溺れそうだった。口の端からはもちろん、鼻からも精液が漏れ出している。

チカツチカツと意識が途切れ途切れになった。ごぼごぼと咳き込み、精液を吐き出し、飲みながら、心が押し上がっていく。二穴に挿入された二本の肉棒も、挿入られた時の倍以上に膨れ上がり、亀頭を痙攣させ、限界を告げた。

「ふあっ、わ、わらしもほっ！」

「よし！ いいだろう、イクぞ！」

それは唐突に訪れた。

自分自身で突き込んだ肉棒が一回りも二回りも膨張する。同時に膣壁が収縮し、勃起を締めつけた。腸壁も同じく引き締まる。

締めつける感覚と、締めつけられる感覚。二つの感覚を共有した瞬間――。



「ひぐっ！ ほごうっ！ わ、わわわ、わらっし、ひぐっ！ ほおっ、ほおおおっ！」  
 プシュッ！ ブジャッ！ ドッビヤアアアッ！ ドブッ、ビュブルブ！ ドビュビュ  
 ウウッ！

蓋をされていた亀頭部が開き、濁流のように精液を噴射した。挿入された時いきなり放たれたものとは比べ物にならない。

初めての同時絶頂に、凜の蜜壺は潮を吹き、更に尿道が緩まった為に失禁していた。

「ひぐっ！ わは、わひ……ひごうっ！」

一度絶頂に達しても、それだけでは終わらない。

何度も何度も快楽の波が凜の身体に寄せては返していった。

身体を痙攣させ続ける少女から、二本の男根が引き抜かれる。するとまるで尿のように、精液が流れ出た。地面に精液の池ができる。

「いっばひ、いっばひの子種……はあはあ、もっともっどほしひ……」

脱力し、精液溜まりの中に倒れながらも、少女は次の快楽を求め、腰を振り続けた。

そこに戦姫の面影はない。

そんな狂乱の宴は翌朝まで続いた。凜はその間宴の中心に居続け、全身は白濁に染まっていた。乾いた精液で髪はパリパリに固まり、籠手や脛当、佩楯に鎧袖も元の色が分から

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**